

2018年我が社の

2016年10月、人工知能(AI)を活用したフィンランドゼンロボティクス社の選別機「ゼンロボティクスリサイクラー」を稼働させたシタラ興産(埼玉県深谷市)。24時間稼働で作業効率を高めており、人材不足を補えるシステムとして注目が集まる。16年5月に子代目代表取締役就任した設楽竜也代表取締役は17年を振り返り、「18年の展望も聞いた」。

「17年を振り返って評価ポイントは。『17年はAIを活用した自動選別機を通じて環境負荷や経済産業省、自治体、大学研究機関など、業界外の方と数多く出会えた年だった。同時に当社の取り組みを各種紙面にも取り上げていただき、露出も増えた。注目されるようになったことで従業員は一種、適正処理に向けて規律正しく変わった実感がある。』

「受入量が順調に推移している中、同機担当の従業員はじめとして個々が日々、試行錯誤を重ねて



シタラ興産 代表取締役

設楽 竜也氏

故障に柔軟に対応するなどスキルが高まってきた。こうしたことを受け当社の理念である組織力と技術力のアップをこの1年で確実に向上させた」と感謝している。

「従業員は意識が向上できた理由は。『組織力は人材力であることを感じる。そのため会社としては従業員個々の能力が最大限発揮できる環境になるよう努めた。例えば各種セミナーへ参加させたり、講師を招き仕事をする意味などを説くような人間力の研鑽につながる取り組み

も行う。』

3人のゼンロボティクス担当者も意欲的で休日出勤も志願する勢い。彼らは現場の意見が聞きたいとする早稲田大学理工

学術院の大和田秀一教授の依頼で、昨年12月に資源リサイクルにおけるAIロボットの活用事例として講演もした。

従業員数は昨年から高

校新卒が3人、今年4月に大学の新卒1名も加わる予定で、社員数は90人になる。

「自動選別機の運転状況は。『大きな故障は全くな

りたで動かした。その時は動揺したが、更新前のデータを起動させれば稼働できることを学んだ。』

「ゼンロボティクスリサイクラー」は、学習の積み重ねで効率が増えるため、現在は作業効率を高めるためコンベア上に同じ素材が並んでいる場合は、アームから近い方からピックアップするようにプログラミングの

ただいている。現場から動作に関するリクエストを行っているが、プログラムの更新は当社だけの問題ではない。今後、同機が普及していく過程でプログラムを最適化できていけば、新規に導入された事業所は導入後、すぐに最適な稼働ができるはずだ」

「18年からの取り組みは。『

「来年3月から廃プラの中国の輸出規制が始まる。規制は想定よりも緩いから、厳しいか明確ではないが、軟質系混合廃棄物が持ち込まれるケースが増えてきている。そのため、軟質プラ系廃棄物処理はもろろんのこと、処理後のパートナーとの連携も、新事業への申請を済ませたところだ。将来的には軟質プラに特化

中国規制に対応 廃プラ選別強化へ

廃プラ選別強化へ



順調に稼働している AI 搭載の選別機

「自動化を推進している当社にも、機械化に追いついて来られない従業員がいる。職場環境の改善、リサイクル率を向上させるために工場を増設を行っていくのだが、従業員が問題なく過渡期を乗り越えることが安堵し、向上心がないのが理由だ。こういった従業員をやる気にさせるのが課題だ。配置換えによって急にやる気を回復する従業員もいるので、日々の業務を見ながら適材適所を探していく。特に若い人は能力を発揮しにくいので、一人ひとりと話し合いの上で次のステップに進ませるようになっているが、本人の意向で転職させることもある。さまざまな経験を積ませることで次世代のリーダー候補になり得るオールマイティーな人材を育成したい」